

示I-321 手術侵襲からみた周術期 ICAM-1、VCAM-1 変動の意義

三重大学第二外科

小出 章、三木誓雄、荒木俊光、畑田 剛、久保宏幸、大井正貴、石島直人、登内 仁、鈴木宏志
 【目的】: in vitro で IL-6 が産生を誘導することで知られている細胞間接着分子の ICAM-1、VCAM-1 が周術期に in vivo でも IL-6 に誘導され、合併症の発症に関与するかどうか検討した。
 【対象と方法】: 大腸癌患者 53 名を対象とし、周術期に末梢血を採取し IL-6、sICAM-1、sVCAM-1、を測定し、術中出血量、手術時間、感染症を伴う合併症の発生との関連を検討した。
 【結果】: 感染症を伴う合併症を 15 例に認めた。sICAM-1、sVCAM-1 は合併症を有した症例では術後漸増したのに対し、合併症を有さなかった症例では術後上昇せず POD1、7 で有意差を認めた(p<0.05)。また出血量、手術時間は周術期の sICAM-1、sVCAM-1 とそれぞれ正に相関する傾向を認めた(p<0.1)。[考察]: sICAM-1、sVCAM-1 の血中レベルが血中の IL-6 に相関して上昇し、合併症の発生と関連した。sICAM-1、sVCAM-1 の血中レベルの変動が手術侵襲に対する生体の damage や合併症の発生の予測に有用であると考えられた。

示I-322 各臓器手術別におけるSIRS持続日数とMODS発生率の検討及びその問題点

滋賀医大第一外科

小川智道、花沢一芳、谷 徹、遠藤善裕、来見良誠
 内藤弘之、川口 晃、小玉正智

今回我々は1996~1998年の三年間にわたる外科一般病棟におけるSIRSの持続日数とMODSの発生率の検討を行った。【対象症例】全麻下消化器外科手術467症例を対象とした。【検討項目】①各手術における術後SIRS持続日数と合併症発生、MODS発生 ②SIRS持続日数と合併症の種類及び頻度 ③SIRS項目数とMODS
 【結果】①食道手術では他手術に比較して合併症及びMODS発生までのSIRS持続日数が延長した。②上記の結果と同様に食道手術では、合併症発生率は高いがMODSへ移行する率は他と差がない。また、イレウス手術では合併症発生率は他と差はないが、MODSへ移行する率が高い。③各手術においてSIRS項目数が増えるにつれてMODS発生率も上昇した。ちなみに菌血症の頻度も上昇した。今回は特にイレウス症例に関してSIRS持続日数とMODSへの移行に関しての因子を解析したので報告する。

示I-323 消化器癌術後の手術侵襲と全身性炎症反応症候群(SIRS)

(市立札幌病院外科)

三澤一仁、松本秀一郎、安達大史、上田拓実、篠原敏樹、大川由美、堀江 卓、尾崎 進、佐野秀一、中西昌美

【目的】術式別に SIRS の診断基準に基づき、術後 2 週間の病態、術後合併症の発生の有無を検討した。【対象】1 年間の胸部食道癌切除 9 例(A 群)、胃癌胃全摘 21 例(B 群)、直腸癌切除 15 例(C 群)、膵頭十二指腸切除 6 例(D 群)を対象とした。【結果】SIRS の診断基準を満たしたものは A 群 7、B 群 9、C 群 6、D 群 1 例であった。これら SIRS の病態は手術侵襲型(I 型)、手術侵襲+感染型(II 型)、感染型(III 型)に分類された。SIRS 症例の SIRS 持続期間は A、B、C、D 群の順に平均 3.0、1.8、1.5、1 日であった。手術時間、出血量と SIRS の持続期間は相関を認めなかったが、SIRS 持続期間と血清 CRP の最高値では A、B 群で強い正の相関を認めた。術後合併症の発生率は手術侵襲型 SIRS 21 例から 11 例(52%)、その他 30 例から 5 例(17%)であった。【まとめ】SIRS により術後侵襲の評価が可能であった。I 型 SIRS の持続期間は A 群では 2 日以上だが、他の群は 1 日にとどまった。SIRS 症例の術後合併症発生頻度は高率であり、II 型 SIRS では肺炎併発例の予後は不良であった。

示I-324 手術侵襲と生体反応-血液指標からみた術後臓器機能の推移-

新潟大学第一外科

佐藤信昭、親松 学、小山 諭、大川 彰、
 佐藤友威、香山誠司、島山勝義

【目的】手術侵襲に伴う臓器機能の変化を血液指標により術後早期から把握できるか否かを明らかにする。

【方法】消化器癌患者19例(男女比12:7)を右開胸一期的食道切除再建術の大侵襲(E)群(9例)と非開胸食道抜去術、胃切除術などの中等度侵襲(M)群(10例)に分けた。血液指標は肝機能としてGOT、GPT、腎機能はCre、腸管機能として血漿ジアミンオキシダーゼ活性(DAO)を用いた。また、血漿グルタミン濃度(Gln)を測定した。各測定値を術前値に対する百分率(%)で表し、術後1、3日目のピーク値(peak)を両群間で比較した。

【結果】手術時間、術中出血量はE群がM群より大きかった(p=0.0011、p=0.011)。GOT、GPTは術後増加したが、E、M群でpeak%GOT、peak%GPTには差を認めなかった。peak%DAOはE群では有意に低く(p=0.0054)、peak%GlnもE群ではM群より低下した(p=0.052)。

【まとめ】大侵襲に対して腸管はより鋭敏に反応した。この腸管機能の低下はDAOにより術後早期から把握できることが確認された。